

福島と『マトリックス』 と新しい社会

合原 弘子



現在の日本は、原発に関して、「事故前後で、以前の日本とは全く違う世界になったと感じている人」と、「これまでの日常が続いていると思っている人」の2つにきっぱり分かれてしまったように見えます。

後者は、原発周辺は大変だったかもしれないが、汚染はそれほど大きなものではないと思っている人たち。前者は、事故は非常に深刻で、汚染は東京を含む東日本の大半に及び、食品汚染も深刻だが、政府はほとんど何の対策もとっていないと見ています。

私は明確に前者側なのですが、そこから見ると、後者の人たちは、政府やマスコミや有名大学の学者などにだまされていると思えます（たとえば、事故前にはレントゲン室などの放射線管理区域は厳重に管理されていましたが、いまはその20倍だの100倍だのまで安全ということになり、福島市や郡山市等では、子どもたちがそういう高汚染の環境で普通に遊んだりしている。汚染されている可能性が高い野菜等も給食で食べさせられている。東京等にも危険なホットスポットがかなりあるのに、一部の人しか問題にしていない——こうした光景は私から見ると異常ですが、そう感じる人は少数派で、多くの人にとっては、異常と思うほうが異常に見えるようです。）こうした多数の人たちはどうも、だまされているというだけでなく、これまでの日常が続いていると思いたいのではないかと感じます。もし現実を見始めると、あまりに大きな断絶があるので、それを見たくないのだろう、と。

映画『マトリックス』では、人々は眠ったまま安楽な夢を見ています。真実を知りたいという人は非常に少なく、ほとんどの人は夢を見続けたいと願っています。日本人の大半は、ちょうどそんな世界に生きているように感じます。

そして、スーパーマーケットで買い物をしているときなどに、私もふと、そういっ

た「夢の世界」に入りたいと思うときもあります。何事もなかった、悪夢はもうすぎて、また以前の日常が戻っているのだ、と思いたくなるのです。

しかし現実には、政府の基準値は事故前の何十倍、何百倍に上がっていて、検査はごく一部しか行われていない状態であり、店に並ぶ野菜や魚の多くは信頼できないという状況であることを私は知っています。そして、チェルノブイリでは奇形の赤ちゃんや子供たちの病気、若くして白血病になる等の悲劇がたくさん起こったのに、原発を推進させるために、それらの事実は「なかったこと」にされていることを、私は知っています。

マトリックスでは、真実を知ることが現実と闘い続けることを意味します。夢の世界を維持しようという勢力が、真実を知った人を攻撃してきます。現在の日本では、そこまでの状況ではないように見えるかもしれませんが、しかし、真実を知った人は日常と闘い続けざるを得なくなることは同じです。その「闘い」とは、信用できない政府やマスコミや市場から自立し、情報を集めて自分で考え、可能なかぎり安全な食品を求め、社会をできるだけ正しい方向に向けるということです。たくさんの人たちと共に眠るのではなく、ごく少数であっても、明確に目覚めて、現実にあらがい、良い方向を目指すという「自立」です。

そしてその自立は、孤立にならないよう、グループ化が必要です。今までの社会は、市場化された社会で個人が自由に生きられるという幻想がありましたが、市場を信頼していない今となっては、「目覚めた人たちは「違う方向の共同性」をめざす必要があるのです。そしてそれは、実は楽しいものでもあることは、3月の経験で思いました。

3月の原発事故のとき、長野県にある我が家には、茨城や東京の友人や親族が避難してきました。刻々と変化する原発の最新情

報を常に集めつつ、仕事としてニュースサイトの編集をしていたので、そこでも情報を流しつつ、家の目張りや安全な水を貯めるという対策も行なっていましたが、同時に、同居していた私の父が病気が急に悪化して入院しその日に亡くなり、その葬式も家で行いつつ、さらに九州まで親族たちで避難し、公団住宅を借りて10人くらいでしばらく共同生活するという、非常に忙しい、非日常な日々でした。

そのひっちゃかめっちゃかな日々は、恐怖やストレスや不安もありましたが、同時にいま思い出すと楽しい日々でもありました。政府の対応はひどすぎる！と友人といっしょに怒ることはストレス解放になっていたし、毎晩宴会もしたりして、今まで話すことがなかった親族とも親しく話して、仲良くなれたり。服やふとんも共有したり、みんなで掃除をしてくれたり炊事をしてくれたりして感謝しているうちに、今まで大事に守ってきたが実はつまらないものだった「個の壁」が崩れ、みなが家族に思える感じがわかってきたのです。

いまは長野の家に戻っていますが、週末に農作業を手伝いに知人や親族が来たりして、共同性は続いています。東京の汚染状態を恐れている若い女性も、会社を辞めてこちらに引っ越して来ることになりました。

日本の各地で、必要に迫られて、こうした共同性が生まれているのではないかと思います。自然のなかで、信頼できる人々と生きることは幸せなことです。自然が汚染され、社会の多くが信頼できなくなったなかでは、その幸せは特に鋭く感じられます。

原発の状況はまだ予断を許しませんし、現地の状況はひどく、私たちも被曝していないわけではない等、問題はもちろんたくさんありますが、こうした生活をしていくことが、今後生まれるべき「新しい社会」につながっているという感覚があります。